

進路保障に係る学校訪問より

同和教育指導員 佐藤 道子

同和教育指導資料19集では、「進路保障」を次のように定義しています。

「進路保障」とは、同和地区児童生徒をはじめ被差別の立場にある児童生徒、様々な困難を抱えている児童生徒、さらには、すべての児童生徒が、自ら主体的に学ぶ意欲と態度、また、確かな学力と豊かな感性を高め、健康の増進を図りさらに、進路に対する明るい展望と差別に立ち向かう強い意志を持って、将来をたくましく切り拓いていこうとする態度や能力を身につけていこう、幅広い教育活動を計画的に進めていくこと。

この「進路保障」という言葉は1960年代の同和教育の取組のなかで言われるようになりまし。当時は、同和地区児童生徒が長年の差別により就職や教育の機会が十分に得られないという厳しい実態がありました。現在、一定の改善は見られるものの完全には保障されておらず格差は現存しています。このような実態を踏まえ同和教育において「進路保障」の取組を大切にしてきました。

進路保障に係る児童生徒支援加配校への前期学校訪問では、本年度の進路保障の推進について伺うことができました。

学校の規模や地域環境によって実態は様々ですが、まずは同和地区児童生徒をはじめ様々な困難を抱える児童生徒の実態および保護者や地域の人の実態や思いを把握することです。そして課題を明確にすること、さらにそれを全職員が共通理解をして取り組むことが大切だと思いました。また、進路保障の推進に当たっての体制づくり、連携づくりに、管理職・推進者を中心にして取り組もうとしておられる姿が見受けられ、力強く感じました。

今後、各学校で全職員が一体となり、同和教育を基底に据えた教育活動を日常的に実践し、進路保障の取組を積極的に推進していただくようお願いします。



特別な支援のための非常勤講師配置事業 (にこにこサポート事業)に係る学校訪問指導より ~1学期訪問を終えて~

指導主事 糸賀 康弘

島根県は、「小学校の通常の学級に在籍するLD、ADHD、高機能自閉症等発達障がいのある児童に対して一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を克服するために必要な支援を行う。あわせて、学校における適切な教育的支援の在り方を明らかにするとともに、校内体制の充実に資する。」ことを目的として、非常勤講師を配置する事業を実施しています。

平成17年に県内50小学校に50名の非常勤講師を配置して開始したこの事業も、そのニーズの高さにより昨年度から県内100校に100名を配置するに至りました。

教育事務所は、事業の状況把握を行うとともに事業趣旨の理解を図るために、昨年より全ての配置校(管内33校)への学校訪問指導を実施しています。

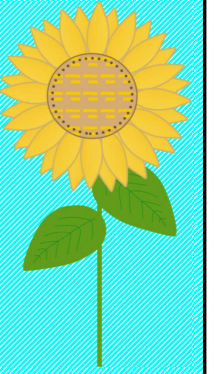
非常勤講師の職務内容は「校内体制の中に位置づけ、原則、学級担任等の指導を補助する。」ことです。したがって、具体的な支援目標、支援内容等については「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」をもとに、校内委員会で話し合うことが必要になります。また、通常の学級の中で適応していく力を育てることが基本であることからT-T方式の授業形態が基本となります。

管内では、「自立と社会参加」の視点から、組織的な対応を工夫する学校が増えています。

- 【例】
- ①非常勤講師による個別支援を計画的に減らしていく。
 - ②児童が違いを認め合い、支え合う関係となるよう「学級づくり」に力点を置く。
 - ③だれもが分かりやすい授業づくりに取り組む。



管内の教育



所報

第47号

主な内容

- 1 調整監 学校訪問を終えて
- 2 管内各市町における社会教育の取組
- 3 進路保障に係る学校訪問より
- 4 にこにこサポート事業に係る学校訪問指導より

出雲教育事務所
平成25年 8月

学校訪問を終えて

調整監 松本 泰治

今年の夏の猛暑やゲリラ豪雨などの異常気象は、全国各地に大きな被害をもたらしました。県内でも、石見部で甚大な豪雨災害がありました。心よりお見舞い申し上げます。

さて、学校現場を離れて5カ月が経とうとしています。4月当初は、明るく元気な子どもたちの声が聞こえない生活にどこか物足りなさや一抹の寂しさを感じていました。そんな中、5月上旬から6月中旬まで実施した学校訪問は、各校長先生方の教育への熱い想いをお聞きしたり、学校現場の雰囲気を久しぶりに味わったりする機会となり、私にとりまして、一服の清涼剤のような日々でした。

各学校では、校長先生、教頭先生、教職員の皆さんが明るく出迎えてくださり、子どもたちの元気な挨拶が聞かれ、本当に気持ちの良い訪問をさせていただきました。ありがとうございました。

この訪問では、学校経営全般のほか、校内体制と人事異動の計画、いじめや体罰への対応、教職員の育成・指導について、現状や考えをお聞きいたしました。

各学校とも、校長先生の崇高な教育理念のもとで、児童生徒の実態を的確にとらえ、自校の課題を明確にした経営構想が立てられていました。そして、学校教育目標達成のための豊かな教育活動の展開、それを支えるより良い教職員集団の育成、家庭・地域との連携体制の整備が進められていました。管内全ての学校がそれぞれの教育目標を達成し、明日の島根、明日の日本を担う心豊かでたくましい児童生徒の育成が図られますようお願いいたします。

また、昨年度より大きな問題となっている「いじめ・体罰」の対応については、QUテスト、日記、生活ノート等の活用による実態把握、教育相談の充実、望ましい集団づくり等の未然防止の視点、ケース会議や生徒指導職員会等の校内体制整備の視点、法令研修や事例研修等の資質向上の視点で取組が進められ、全ての学校でその防止のために努力されていることを実感いたしました。今後も常に危機意識をもって取り組んでいただきま

すようお願いいたします。

そして、この訪問の最後には所長が各校長先生に『今年度、一番取り組みたいこと』をお聞きしました。その中で多かったことは何だったでしょうか・・・？

最も多かったのが「教職員育成」の取組です。そして、次に多かったのが「家庭・地域との連携」の取組でした。裏を返せば、これらは校長先生方から見た大きな課題ととらえることができます。

『教育は人なり』と言われます。人は人によって教育され、成長していくことは自明の理です。教育の質の向上は教職員の資質向上にかかっています。管内では、今後10年間で小学校では40%、中学校では37%の教職員が退職をします。ミドルリーダーや若手教員の育成は喫緊の課題です。ぜひ、各校におかれましては、OJTの視点を大切にしながら、一人一人の力が十分に発揮され、自らの成長が実感できる職場づくりを進めていただきますようお願いいたします。

また、家庭・地域の教育力の低下が言われて久しくなります。「最近の保護者は・・・」「地域の協力体制が・・・」という声もよく聞きます。しかし、それで手をこまねいていてよいのでしょうか？管内でも、学校が積極的に情報発信をして、家庭や地域を巻き込んだ教育活動を展開していくことにより、学校理解と協力支援体制の充実につながったという事例が多くあります。より良い連携は能動的な働きかけからという視点で進めていくことが大切ではないでしょうか。今後も学校・家庭・地域が一体となった教育活動の推進に努めていただきたいと思います。

以上、このたびの学校訪問で気がついたことを述べさせていただきました。現場へのお願いばかりで申し訳なく思っておりますが、教育事務所といたしましても、各校のより良い教育活動の展開や教職員の皆様の資質向上のために、できる限りの支援をいたしますので、よろしくお願いたします。

最後になりましたが、ご多用中にもかかわらず、多くの資料をご準備いただき、懇切丁寧にご説明いただいた校長先生、教頭先生に心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

管内各市町における社会教育の取組

雲南市 不登校児童生徒対象体験プログラム

雲南市教育委員会では、様々な理由により不登校や不登校傾向を示す児童生徒に対して、多様な体験活動の場を提供する「にこにこ広場（不登校児童生徒対象体験プログラム）」を実施しています。

プログラムの企画・運営は社会教育コーディネーターが行い、学校や家庭との連絡調整は教育支援コーディネーターが行います。

これまでの2年間は、ロケットストーブを作って東日本大震災の被災地に送ったり、野外で調理をしたりする自然体験活動を中心に、年間数回の活動を行ってきました。本年度からは、文化体験プログラムも加えて、毎月2回に活動回数を増やしました。本年度の実施計画は下表のとおりです。

7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
自然体験プログラム ・流しそうめんと南極体験談 ・川で遊ぶ ・基地づくり		文化体験プログラム ・楽しく踊ろ～ダンスにチャレンジ～ ・舞台を創る(影絵劇) ・バンド結成! ・舞台背景の製作 *参加者の希望による選択制			舞台発表	50年前のカメラを組み立てて、50年後の自分に写真を贈る (しまね自然の学校との共催)		

開始当時と比べると、少しずつではありますが、参加者が増え、約3分の1の児童生徒が学校復帰、またはその兆候を見せています。



「ピザの調理と会食」



「ロケットストーブの製作」



「キャンプの一場面」

<昨年度の活動から>



雲南市のキャリア教育～『夢』発見プログラム～

雲南市では、キャリア教育を雲南市教育の中心とし、雲南市キャリア教育推進プログラムである『夢』発見プログラムを市内全保幼小中で取り組んでいます。

平成23年1月の中央教育審議会答申「キャリア教育の方向性」を受けて、平成24年度に改訂版を作成し、平成25年度から改訂点を周知し、さらに推進しています。

今回の改訂点

- キャリア形成発達に係る能力（4領域8能力）を「**基礎的・汎用的能力**」に改訂。
人間関係形成・社会形成能力 自己理解・自己管理能力 課題対応能力 キャリアプランニング能力
- キャリア発達を**幼児期の教育から高等教育まで**発達段階に応じて体系的にまとめる。
- 家庭・地域の子どもたちへの関わり**を体系的にまとめる。
- 生活科・総合的な学習の時間を核にして、**全教科・領域・活動で**キャリア発達を促す指導・支援をする。

<『夢』発見プログラム研修会>

8月に市内の保育園・幼稚園、小・中学校のキャリア教育担当者を対象に『夢』発見プログラムの理解と推進を図るため、研修会を開催しました。総勢60名が一堂に会し、本プログラム策定の経緯や改訂のポイント、取組の情報交換、保幼小中の連携と一貫した指導についての協議を行いました。推進に向けて気持ちを新たにすることができました。



中学校区別で協議



成果物：取組とつけさせたい力の系統性を確認しました。

出雲教育事務所管内では、雲南市に2名、奥出雲町、飯南町に各1名の社会教育主事が派遣されています。派遣社会教育主事が中心となって実施している各市町の社会教育の取組について紹介します。

奥出雲町 奥出雲町連合吾妻山キャンプ～出会い・つながり・深まりから表現へ～

奥出雲町では、昨年度から町内の5年生全員を対象に、連合吾妻山キャンプを行っています。全町一斉に行うことは困難なため、仁多地域と横田地域に分かれて実施しています。今年度は、仁多地域は、予定通り吾妻山で実施できましたが、横田地域は雨に見舞われたため、馬木小学校に会場を変更して行いました。

キャンプのテーマは「出会い」です。このキャンプを通じて「ひと」（友だち・先生・キャンプ支援者など）、「もの」（吾妻山の自然など）、「こと」（火をつける技・調理の技など）との多くの出会いが生まれました。

特に「ひと」との出会いについては、事前の顔合わせが全くないので、当日は新鮮そのものです。初めての出会いからどうつながりを深めるかが大切です。つながりの中で自分や友達のよさを発見し、振り返りをしながら人間関係を深めるのです。

スタンツも「協力・思いやり・工夫」を合い言葉にそれぞれのグループで、「キャンプを意識した表現」へとつなげました。振り返りカードでは、「5つのめあて」を自己評価し、お互いの気づきが主体的な活動へとつながっていきました。児童のクラフト作品にも「出会い・声掛け・友達・協力」などキーワードになる言葉があり、キャンプの出会いを大切にすることが表現されていました。

今年度はキャンプ文集の作成を最終的な振り返りとし、この文集を来年度のキャンプへつなげていくこととしています。

なお、奥出雲町では連合活動として、この他に6年生で「修学旅行」、「たたら操業体験活動」を行っています。児童相互のつながりを深め、コミュニケーション力や表現力を高める活動を最終ゴールと位置付けて取り組んでいます。



飯南町 飯南町の地域医療教育



平成24～25年度の2か年間の限定で、県が実施する「ふるさと教育推進事業」に「地域医療教育」が加わりました。医師確保や救急医療体制の確立など、「地域医療」は、飯南町にとっても重大かつ喫緊の地域課題です。首長部局と飯南病院（来島診療所）で組織する「飯南町生きがい村推進センター」でも、学校や地域と一体となった取組をしようとしていたところでした。そこで、町内全小中学校で「地域医療教育」を実施することになりました。

実施にあたっては、校長会での説明、教育委員会と生きがい村推進センターによる協議を重ねました。保小中高一貫教育を進める飯南町では、飯南高校にもつながるように、高校関係者との協議も同時に行いました。地域医療教育の計画書作成にあたっては、町教委から飯南病院などを活用した内容の学習案を示したり、消防署からドクターヘリと救急車の出動状況について資料提供してもらったりして、学校にも身近な課題として意識してもらうように努めました。生きがい村推進センターは、講師派遣をセンター事業として行ったり、他市町・団体がもつ講師や教材に関する情報提供を精力的に行ったりしました。こうした関係機関の連携により、各学校では充実した学習が展開されました。学校保健委員会で取り上げ、子どもたちだけでなく、保護者や地域の人々と一緒に考えた学校もありました。

ドクターヘリ出動回数年間約60回、高齢化率約40%という現実の中で、「ふるさと教育」としてだけでなく、飯南町の「地域医療教育」は町の半永久の課題として継続していきます。

